

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 関係の近代化—植民地台湾の日本語文学研究

氏 名 張 文 聰

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は 1895 年~1945 年台湾の日本植民地時代、特に 1940 年代前後植民地台湾日本語文学の隆盛期における、日本語によって、「台湾」を対象に書かれた小説を対象に考察してきた。個人と個人の間、個人と社会の間に入っているジェンダー秩序の力という「関係」が近代化になるプロセスは、具体的にどのような複雑な有り様を呈しているかを明らかにした。

本論文は 3 つのテーマに分けている。1、2 章は植民者である日本人はどのように植民地台湾を見たか、そして植民地統治の安定期と戦間期にどのような違い、変化があったかを考察してきた。まず第 1 章「大日本帝国の〈包摂〉と〈排除〉：佐藤春夫の「日章旗の下に」をめぐって」においては、「大日本帝国」の「国民」形成の物語としての側面を明らかにした。特に「日章旗の下に」の改題に近代的国民国家と近代的家族=家父長制の論理が働いていることを論じた。「日章旗の下に」は大日本帝国の論理から逃れるものではないが、植民地表象における植民者の構成は単純なものではないと示した。そこにはジェンダーや、地域、階級などの要素が交差している。また、「日章旗の下に」は、植民者と被植民者の対立という図式を脱し、植民者内部の問題性、非均質性を暴き、大日本帝国に〈包摂〉されたもの、〈排除〉されたものを描くことに成功した。「日章旗の下に」を読み直すことによって、佐藤春夫の台湾関連作品における、新たな地平が見えてきた。

第 2 章「植民地台湾を見る眼差し：庄司總一の「陳夫人」を読む」においては、旅行者の佐藤春夫と違い、庄司總一は定住者という眼差しと、内地人という他者という目線をもって台湾を客観視できたため、それまでの台湾人作家と日本人作家が描けなかった、描けなかった作品を完成した。『陳夫人』において台湾人は紋切り型の一枚岩として描かれておらず、極めて複雑で多様で、立体的なものとして描かれている。『陳夫人』において台湾人を描く視線は、内地日本からのものではなく、1920 年代の台湾知識人が台湾を主体にしている目線と重なるので、台湾人を見下すような描き方ではない。そして『陳夫人』は当時も今日も非常に注目された「日台共婚」というテーマを取り扱っているが、植民地台湾における実態に極めて近く、正確性の高い描写をしている。最後に、『陳夫人』は留学経験のある植民地青年を客観的に描きえたことと、台湾の伝統文化にも日本文化にも相対化して見ることができたから高い評価に値すると思われた。

3、4 章は台湾人男性作家の作品における男性性の分析になる。これまでに注目されてこなかった複

数の男性性がどのように植民地統治と協力しながら軋み合うかを明らかにした。第3章「植民地下の父と子—張文環の「閹雞」を読む」は、R・コンネルの〈覇権的男らしさ〉論を使い、まず「閹雞」のなかの男性人物を家族別、世代別に分けて、性人物の中にもジェンダー秩序の力関係によってより強い人物と、より弱い人物という関係性が見えるようになった。世代別で見ると「閹雞」には確かに「強い父親」と「弱い息子」の対照があるが、既存研究のような、近代と伝統、都会と農村の対立関係は見当たらない。父世代と子世代の間には対抗、対立の関係もない。むしろ父世代も子世代も、〈覇権的男らしさ〉に近づけるようにと懸命に生きている。林清漂のようなある程度成功した人物もいれば、阿勇と阿凜のような排除された人物もいる。そして、〈覇権的男らしさ〉は植民地統治と緊密に繋がっていることも明らかにした。また、本章で〈身体〉を〈覇権的男らしさ〉の要素のひとつとしたが、ほかの要素とは大きな違いがあると描かれている。それは先天的にせよ、後天的にせよ、障害を持つ男性人物は、〈学歴〉などを持っていても〈周縁的男らしさ〉に追いやられることがわかった。作者張文環が〈身体〉がいかに〈男らしさ〉に影響を及ぼすかに目をむけるのは、1942年に実施された陸軍特別志願兵制度に関わっていると思われる。陸軍特別志願兵制度の実施によって、台湾人男性は超えられなかった〈身体〉という「障害」を超えて、はじめて国民の義務を果たし、「戦場に立つべき」男になり、「男性としての面目が確立された」ので、植民地台湾、そして大日本帝国における〈覇権的男らしさ〉への引力の強さがわかり、今後の研究に役に立つと思われる。

第4章「秋が清らかで晴れ渡る理由——呂赫若「清秋」論」においては、國分功一郎が提出した「中動態」という概念を使い、先行研究のように「近代／反（前）近代」、「能動／受動」という図式をもって、人物や小説を位置づけ、意味づけすることは不公平で不正確なのであることを論じた。帝国日本の家父長制には儒教思想を背景にあるから、漢民族系台湾人に親和性が高いだけでなく、前近代の思想は必ずしも近代思想と対立しているわけではない、むしろ錯綜して入り組んでいて、見えない共犯関係を構築していることも示している。〈孝行〉は台湾と日本と共通する価値観で、帝国日本の家父長制は前近代の地続きのところもあることがわかるから、東アジア地域には古くから同じ価値観を共有し、近代も必ずしも前近代と対立しているとは限らないことを明らかにした。だから帝国日本が台湾において行われた植民地統治はいかに強固で、生活や価値観の隅々まで浸透しやすく、察知しにくいものだと理解できる。そして、能動でもなく受動でもない、「非自発的同意」という中動態をもって、「清秋」の人物を解釈できた。耀動も耀東も、黄明金も江有海も、能動的で自発的に意志決定のできた人物はひとりもない。耀東と黄明金が南方を目指しているのは、当時の国策の影響もあり、〈覇権的男らしさ〉に惹かれたこともあるので、彼らが決心したように見えるだけ。耀動は自分から将来について何も決定していない。唯一実行した小さな反抗は、結婚しないことによって、〈孝行〉への反抗なのである。強制されていないが自発もしていない、自発的ではないが同意している耀動は、すがすがしい心境で結末を迎えたのもそのためだと思われる。

5、6章は数少ない女性作家の作品を取り上げて、恋愛、結婚、出産などの問題を考察することを通して、彼女たちはどのように主体性を立ち上げて、どのような困難に直面されたかを明確にした。第5章「帝国に抗う女の語りにくさ・読まれにくさ—坂口禰子の「灯」を読みなおす—」では、坂口禰子が「灯」を書いて、『台湾文学』に掲載され、第一回台湾文学賞の受賞と選評、そして小説集『鄭一家』が出版されるまでの経緯を辿った。また、雑誌『台湾文学』の発足から、その同人たちの持つ文学観と、坂口禰子がそれに合致する作風を持って作品が評価されたことも確認した。そして「灯」においての台湾色の薄さが、『台湾文学』の主張との食い違いから、当時の検閲の厳しさと、坂口禰子の作風転換について考察した。既存研究はその戦争協力の一面に関心を取られてしまい、坂口禰子が作品を通して伝え

たいことを見落とした。本章はテキスト分析をもって、「灯」の語り手・お貞は〈近代家族〉論の強い支持者であることを確認した。〈近代家族〉論と天皇制国民国家の親和性により、大東亜戦争のプロパガンダや帝国の言説という隠れ蓑もうまく機能した。しかし、「血を継ぐ子孫はな」という結末を迎えて、「灯」は万世一系の大日本帝国を照らす作品でなくなり、〈近代家族〉小説でもなくなり、作者・坂口禰子の自己表象小説にもならなかった。坂口禰子は「灯」を通して、女性作家が書くことにおける困難性を示しながら、帝国に抗い、「血を継ぐ子孫」のいない「リアリティ」が立場の異なる複数の読者に対する彼女の応答であろう。

第6章「反逆的な恋愛と結婚—葉陶「愛の結晶」を再読する」では、葉陶と楊達が夫婦で主宰した雑誌『臺灣新文學』と、中央文壇『文學案内』との比較から始め、『臺灣新文學』が『文學案内』の地方同人誌的性格を持つことを明らかにして、葉陶が『文學案内』に「愛の結晶」を投稿した理由を探った。そして、「愛の結晶」が『文學案内』の選者貴司山治に評価されなかった理由は、「愛の結晶」はそのような明確な「階級闘争目的の自覚」を持っていない。代わりに〈女性の連帯〉とナップが批判した〈恋愛結婚〉をテーマにしているので、貴司山治には理解され得なかった。「愛の結晶」が謳う〈恋愛結婚〉は、大正期日本の恋愛論と重なる部分があるが、大正期日本恋愛論の主流のような、国家を支える体制的なものというより、当時台湾で起きた社会運動と関わり、「台湾人」そして「新女性」という、アイデンティティの自覚につながるものであった。「階級闘争目的の自覚」とは異なるが、封建主義や既成社会への反逆性という点からいうと、「愛の結晶」における〈恋愛結婚〉は決して問題を矮小化したわけではない。また、「愛の結晶」は、男性への批判に留まらず、もっと開かれた「女性の連帯」に展開した。それは、植民地台湾社会における女子教育によって出現した〈女学生共同体〉であると同時に、更に「愛の結晶」を「共有」や「絆」、「支持の与えあい」、「抵抗」を重視する、より開かれた〈レズビアン連続体〉として読み得ることの意味を強調し、階級の分断を超える台湾人女性としての抵抗意識も読み取れる。また、農民運動に身を投じて、植民地台湾日本語文学に積極的に関わった作者・葉陶の実生活に照らし合わせると、〈女学生共同体〉という枠組みでは片付けることのできない部分も多い。〈レズビアン連続体〉という挑戦的な読み方は、植民地台湾日本語文学に長らく不可視化されてきた女同士の共同経験や連帯を浮き彫りにするだけでなく、「愛の結晶」をより豊かなテキストにもするのである。

以上の考察を通して、植民地台湾日本語文学における関係の近代化というプロセスは、一つではないことを明らかにした。植民者も被植民者も、男性も女性も、複数かつ多様性に満ちており、決して一枚岩ではない。そして近代か前近代か、抵抗か戦争協力かという、二項対立の図式をもってまとめられない有り様を提示した。